

喪失体験を繰り返した男性野宿生活者のレジリエンス

Resilience of Homeless Man Who Had Repeatedly Experienced Loss

白井 裕子
HIROKO SHIRAI

摘要

The objective of this study was to identify the resilience of Mr. A, a homeless man who had repeatedly experienced loss. I tried to find out what he lost amid a series of negative events and how he coped and managed to recover every time. Through an interview with Mr. A and based on an observation record of his participation in health consultations at soup kitchens, while interpreting the experiences and scenarios that he had gone through, I analyzed the reasons or factors that led him to turn around and head in the direction of recovery. He had experienced loss and recovery several times in a relatively short period of one year or so. Due to health reasons, he quit his job and lost the capability to maintain his current lifestyle. In order to get his life back together, he applied for public assistance. He temporarily moved into a public housing facility and placed an expectation on welfare benefits, but because he was not able to get the treatment that he had expected, he left the facility on his own accord. He was prepared to go back to sleeping on the street if not for a man who received public assistance and was kind enough to let him stay at his apartment. However, after that welfare recipient was hospitalized, he left the apartment, found a garage of an empty house, and lived there temporarily. The garage was torn down and cash worth 130 thousand yen and his driver's license were stolen in a moment, which forced him to sleep outside. Even though he lost everything, he perceived his experiences in a positive light. Despite repeated experiences of loss, he did not let negative feelings drag on and every time he lost, he adapted himself to the situation and headed into the process of recovery. This was attributable to his personal traits, including the ability to take action and adjust his feelings, his social skills, and his positive and optimistic character. Meanwhile, the path that he took was believed to be not only the process of recovery but that of adaptation to homeless life as well.

キーワード

レジリエンス、野宿生活者、喪失体験、回復、適応

Resilience, the homeless, loss experience, recovery, adaptation

はじめに

人は、生きていくうえで自然災害や事故、病気、家族との死別、離婚、失業など様々な逆境や困難に直面する。しかし、その中で生じた苦悩や悲嘆の大きさは個人の特性やその時の状況によって異なるとしても、必ずその状況にうまく適応し、回復の過程をたどる。それは、苦悩や悲嘆が生じるのと同時に、それを乗り越えなければならないという気持ちも生じるからであり、我々のほとんどに回復する力、つまりレジリエンスがある（ボナーノ、2014、11-64頁）。

レジリエンスは、「脅威や困難などの状況下においても、うまく適応する過程・能力・結果」と定義されることが多いものの^{註1)}、多様な意味を包含することから定義することが困難な概念であるとされる。この困難さの背景には、もともとレジリエンスはごく稀にしか見られない現象であると捉えられてきたが、1970年に行われた統合失調症患者の長期的横断研究の中で、レジリエンスは比較的多くの個人において見られる現象であるという知見が得られたことがあげられる（村木、2015）。この結果、現在国内では、東日本大震災による喪失体験（高橋・神林・グッドウィン・孫・ベン、2017）や余命宣告を伴う病い体験（小林・松田・所、2018）など、深刻な状況の中で抑圧された気持ちがどのように回復するか注目した研究から、誰もが経験し得る日常的なネガティブライフイベントに注目したもの（長内・古川、2004）まで、幅広い領域で研究が行われるようになった。このように研究領域が広がることは研究の可能性を広げることにもなるが、一方で定義の多様化が生じることにもつながった（村木、2015）。

太田・岡本（2017）は、レジリエンスの定義が多様化する中でも、①ネガティブな結果をもたらすような重篤なストレス、②ポジティブな適応を促進する個人と環境、③良好な適応、に着目した概念であることは一定の共通認識が見られるとしている。しかしながら、②ポジティブな適応を促進する個人と環境においては、適応を促進する因子を個人特性（心理特性や能力）とみるか、または個人特性と環境要因（家族サポートやソーシャルサポート）との力動的な相互作用のプロセスとしてみるかについては、研究者によって立場が異なっているのが現状である（太田・岡本、2017；佐藤暁子・金井篤子、2017；村木、2015）。

本論文では、野宿生活者を事例としてレジリエンスの問題を考える。なぜなら、野宿生活者はネガティブな結果をもたらすような数々の喪失体験をもっているからである。まず、ホームレス状態にあることから住居を喪失した体験があることはいままでもないが、その背景には家族との死別や離婚、失業などが関係していることから、住居の喪失に重ねて、家族や仕事を失う体験もしている。さらに、人は住居を基盤として家族や地域社会とつながり、家庭内や職場、趣味の場などで自身の社会的役割を遂行しながら、社会の中で自身の価値を見だし生きている。そのため、住居や家族、仕事を失うことによって社会的役割を喪失し、その結果、生きる意味や希望を失う。つまり、野宿生活者は生活機能の多くを喪失し、またその多くは将来をも見失う体験をしている^{註2)}。

野宿生活者の喪失体験に関して野上（2002）は、野宿生活になる前だけでなく野宿生活以降でも「友人」「衣類」「健康」「プライド」「自尊心」「夢」「希望」などを失う体験を重ねており、喪失体験から生じた悲嘆をもち続けているという。そのために野宿生活者が人生を積極的・能動的にとらえることを困難にしていると指摘し、心理的ケアの必要性を示している。山際・辻川（2009）もまた、幼少期からの「事故」「病気」「親の死」などといった喪失体験は、今もなお回復しないままに野宿生活者の中に残っており、過去の喪失の見方が転換するよう人生の意味づけを変容させていく支援が必要であるという。しかしここで提起したいことは、もちろん数々の喪失体験の中で悲嘆を持ち続け心理的ケアが必要な野宿生活者がいることは事実ではあるが、他方では喪失体験を自らの力で乗り越えて能動的に生きている野宿生活者も存在するということである。例えば、雨露をしのぐ小屋を建てるために廃材を分けてくれた仲間に出会ったことを「自分は本当にラッキーだった」と肯定し、感謝の気持ちをもちながら生活している野宿生活者である。野宿生活から抜け出すために資金を貯めることを目標とし、それに向かって前向きに生きている（白井、2006、29-32 頁）。このように家や仕事など多くの喪失体験をして生命の危機に直面する深刻な状況の中にあっても、また家族や友人などサポートしてくれる身近な存在をも失った中であって、自分自身の置かれている状況を肯定して前向きに生活している理由には、一つにその人のもつ心理特性や能力が影響すると考えられる。

レジリエンスを促進する心理特性については、小塩・中谷・金子・長峰（2002）や平野（2010）がレジリエンスを測定する尺度開発に関する研究の中で明らかにしている。小塩らは、新たな出来事に興味や関心をもちチャレンジしていこうとする「新奇性追求」、自分の感情を制御することができる「感情調整」、明るくポジティブな未来を予想して将来に向けて努力する「肯定的な未来志向」の3因子をあげている。平野は、将来に対して不安を持たず肯定的な期待をもって行動できる力である「楽観性」、ネガティブな感情に振り回されずにコントロールできる力である「統御力」、目標や意欲を持ち忍耐力によって努力して実行する力である「行動力」、知らぬ他者に対する不安や恐怖が少なくコミュニケーションをとれる力である「社交性」の4因子をあげている。喪失体験を乗り越えて前向きに生きている野宿生活者たちは、このようなレジリエンスを促進するいくつかの心理特性をもち、ネガティブをポジティブにうまく変換しながら生きているのではないかと考えられる。

すでに述べたように、レジリエンスは比較的多くの個人において見られる現象であるという知見が得られている。しかしこれまで野宿生活者の喪失体験に関する研究では、喪失体験から引き起こされる悲嘆は注目されているものの、悲嘆を乗り越えて回復していく過程は注目されてこなかった。本論文では、喪失体験を繰り返したある男性野宿生活者のレジリエンスについて考察する。ネガティブなできごとの中で何を喪失し、どのような対処行動をしながら適応や回復をしていったのか、男性野宿生活者の心理特性に注目しながら適応や回復の過程を考察することを目的とする。

I 研究方法

1. データ収集の方法

A氏に行ったインタビュー内容と筆者が行っている健康相談活動^{註3)}での参加観察の記録をデータとした。

A氏は、筆者が健康相談活動で出会った野宿生活者であり、筆者が直接インタビューを依頼した。A氏にインタビューを依頼した理由は、数々の喪失体験が繰り返されている中でも前向きに明るく生活しており、その理由に関心をもったためである。インタビューに際して、研究の目的と方法を文書で説明し、同意を得た。また、健康相談活動における参加観察記録の中で、A氏とのやりとりが記述されている部分を研究データとすることについても同意を得た。

1) インタビュー調査

本論文では、野宿生活者の喪失体験とその回復に焦点をあてることから、A氏が生活上で体験したできごとや経験の語りが重要となる。そのため、ライフストーリー・インタビューの方法を用いた。

住居を喪失するに至ったときから現在までの生活体験についてA氏に自由に語ってもらうことを意識し、A氏の語りを遮らないよう話す文脈に沿って質問をした。また、ライフストーリー・インタビューは、語り手と聞き手の相互行為を通して構築されるものである。語りを促進するためには、聞き手が語り手の社会的文化的な背景の知識を用いながら、互いがよく知っている話題を出したり、別の視点から語ることを求めたりするなどの工夫も重要であるとされている(桜井・小林、2013; 99-111頁)。そのため、筆者がこれまで野宿生活者と関わってきた中で知り得たことを話題に出したりしながら、A氏の語りを促進するようにインタビューを行った。インタビューは2017年6月に行い、同意を得てICレコーダーに録音した。

2) 参加観察記録

健康相談活動での全体の様子や野宿生活者との関わりを詳細に記録した参加観察(2017.4.13、2017.4.27)から、A氏との関わりの部分を抽出してデータとした。

2. 分析の方法

1) 録音したインタビュー内容を逐語録にした。参加観察記録も合わせて繰り返し熟読し、A氏の生活体験の概要を把握した。重要と考えられる箇所は、ICレコーダーを再度聞き、A氏の口調や間合いのとり方などからA氏が真に伝えたい事柄を探索した。

2) 本研究では喪失体験とその回復に注目することから、喪失したものは何か、またそれに対してどのような行動を起こしたのかについて明確にする必要があると考え、以下のような筆者が独自に考えた方法を用いた。まずA氏の生活上のネガティブなできごとを抽出した。インタビューでは、A氏はある出来事を境に生活が「上がった」り「下がった」りしたと語られたため、その「下がった」と語られたできごとをA氏の「ネガティブなできごと」とした。

次にそのできごとにそって、A氏の喪失体験と回復の過程を整理した。ネガティブなできごとの中でA氏が認識していた「喪失したもの」をあげ、その状況の中でどのような対処行動をしたのかについて「対処行動のきっかけとなった気持ちや考え」「対処行動」「対処行動の結果」の順で、A氏の語りから抽出した内容を整理した。対処行動については、平野（2018）がレジリエンスの対処行動には、意図的な行動も非意図的な行動も含まれるとしていることから、A氏の意識的または非意識的な行動を「対処行動」として取り上げた。

3) A氏が体験したできごとやその場면을解釈しながら、喪失体験の中でA氏が回復の過程に向かった理由や因子を分析した。その際、心理特性や能力に注目しながら、A氏のレジリエンスについて検討した。

II 事例

1. 事例の概要

40歳代男性。男兄弟で育ち、学生のころから人に同調するタイプで、自分から積極的に行動するタイプではなかった。いつも人を見て行動していた。高校卒業後、サービス系の仕事など数回の転職を重ねて、コンビニエンスストアで夜間勤務を始める。常連客とは会話をするものの、夜間一人での勤務であったことから他者との会話もほとんどなく、また勤務時間も長かったために遊びに行くこともなかった。

A氏はコンビニエンスストアでの夜間勤務を続けるうちに、疲弊して退職し、それまで生活していた賃貸アパートを退去した。生活保護窓口に出向き相談した結果、緊急宿泊施設^{註4)}に入所した。その後生活保護受給が決定されたため、生活保護を活用して生活の再生をはかろうと希望をもつが、自分の気持ちとは違う処遇を受けたことへの疑問とケースワーカーへの信頼を失ったこと、また何度も入所施設を変わるように指示されたことから、自ら施設を退所した。

野宿生活を覚悟して寝る場所を探していたところ、偶然生活保護受給者と出会い、その男性のアパートで2、3ヶ月間居候生活をするようになる。その後、その生活保護受給者の入院により、A氏は路上で生活することになった。

雨露をしのげるところをなんとか自分の足で見つけようとしていたところ、空き家の車庫を発見し、7ヶ月ほどそこで寝泊まりする生活を送った。しかしある日、車庫に戻ってみると突然その車庫が解体されており、そこに置いてあった全財産である13万円、免許証など、すべてを失う。それ以降、A氏は路上で寝泊まりをすることを余儀なくされた。

2. A氏の喪失体験と回復の過程

A氏の喪失体験と回復の過程の概略を表1に示した。

職を失ってからのA氏の生活上におけるネガティブなできごとは、【健康上の問題による退職】
【賃貸アパートを退去】【緊急宿泊施設からの退所】【生活保護受給者のアパートから退去】

【「仮住まい」の解体】【路上で寝泊まりする生活】であった。

以下、ネガティブなできごとにそって、＜喪失したもの＞は何か、またそれに対してA氏はどのように生活を立て直そうとしていったのかを説明する。

表1 A氏の喪失体験と回復の概要

ネガティブなできごと	喪失したもの	対処行動のきっかけとなった気持ちや考え	対処行動	対処行動の結果
健康上の問題により退職	健康、気力、食欲	にわかに危機感を感じる	携帯電話で「名古屋 炊き出し」と検索する	毎日炊き出しがあることを知り、炊き出しに通うようになる
	生活維持の機能(収入)	生活保護制度があることを思い出す	生活保護窓口相談する	生活保護を申請する
賃貸アパートを退去	将来の展望	生活保護を受けようと思う	生活保護窓口を訪れる	緊急宿泊施設に入所する 生活保護受給が決定し、生活保護行政に対する期待をもつ
緊急宿泊施設からの退所	生活保護行政への期待と信頼	路上で生活することを覚悟する	路上に出て寝場所を探し、勇気を出してそこに居る人に声をかける	生活保護受給者との出会う
	将来の展望、希望	いい人に出会ったと思う	これまでの身の上話をする	生活保護者宅で寝泊まりすればいいと誘われ、受け入れる
生活保護受給者のアパートから退去	安心できる空間	自分でめばしいところを探そうと思いつ	ぶらぶら歩いている時に、テレビ番組「空き家問題」について思い出す	空き家の車庫を見つけ、「仮住まい」として使う
「仮住まい」の解体	現金 13 万円、運転免許証、印鑑、電池の切れた携帯電話、リュックタイプの鞆	免許証を見たら持ち主がわかるため、連絡はとれないとしても警察に届けてあるのではないかと思う	拾得物として取り扱いがないか警察に尋ね、遺失物の届け出をする	拾得物はないと言われる
		車庫は生活感があったため、解体業者も慎重になり、貴重品に気づくはずであると思う 解体業者に事情を聞いて、貴重品の行方を探そうと思う	解体施工業者に直接話をしに行く	解体業者に罵倒される
	安心、心の余裕、プライド	一番の危機感を覚え、もうダメと思う	これまでの生活を、あまり深刻だと感じてなかったことを反省する 面識のあった仲間の一部始終を話す	草刈りなどの仕事を紹介してもらう
路上で寝泊まりする生活	すべて	路上では冬は越せないから、それまでになんとかしたい	顔をつなぐ	仕事の紹介を受ける
		伝手が大事であると思う	当時者やボランティアに自分から声をかけて仲良くなる	人とのつながりができる 心の豊かさを得る

1) 健康上の問題による退職

A氏は、野宿生活になる直前、コンビニエンスストアで夜間勤務をしていた。A氏は「ブラック」と表現したが、勤務時間帯はいつも一人であり「仕事、仕事、仕事」の毎日を過ごした結果、精神的に疲弊し退職した。「気力を失い、もぬけの殻に近い」。疲れている感じがして、寝たくないのに横になっている状況であった。食べるのも面倒で3~4日食べない日が続いた。

<健康><気力><食欲>を失ったが、この状況の中でA氏はにわかには危機感を感じ、持っていた携帯電話で「名古屋 炊き出し」と検索して、食事がとれる方法を調べようという行動をとった。

こりゃやばいってのが、どっかに出たんでしょね。・・・で、携帯もってたんで、調べて「名古屋 炊き出し」みたいな感じ。はじめは、炊き出しという言葉も知らなかったから、たぶん「名古屋 路上なんか」みたいな感じ。で、「名古屋 炊き出し」みたいに。でね、プリントされてる表^{註5)}があるじゃないですか。あれがサイトにのっってたんですよ。で、こういうのあるんだって、全部、一週間とかあるじゃないですか、それまんまのって。で、知った感じだったですね。(2017,6,14;インタビュー)

場所は異なるが、炊き出しが毎日行われていることを知り、A氏は賃貸アパートに住んでいたころより、炊き出しに通うようになった。

また、退職したことから<生活維持の機能(収入)>も喪失することになり、生活保護制度があることを思い出し、生活保護窓口に相談に行き、生活保護の申請をした。

2) 賃貸アパートを退去

収入がなくなったため、A氏はアパートを退去した。<将来の展望>を見失った。

仕事するときって、家があつての仕事じゃないですか。そういう感じで思ってたもんで、最初家がなくなったとき、どうなっちゃうんだらうってのはありましたよ。多少、保護とかそういうのはあったんですよ。保護は家がある時から申請しとったんで。(2017,6,14;インタビュー)

A氏は、再び生活保護窓口に相談に行くという行動をとり、緊急宿泊施設に入所することになった。緊急宿泊施設に入所中に生活保護受給が決定し、その後宿所提供施設^{註6)}に入所した。宿所提供施設に行けば、すぐにアパートに入れると思っており、生活保護を受けながら生活再生をしていくことに期待をもった。

(宿所提供施設に行けば) 自分的には、最初、職安とかハローワーク、そういうところって、家とかをすぐに借りられるような、病気とかなければ。まあ、職安にいてなくてもアパートとか入れるって聞いていたから、問題なくいけるもんだと思ってたから。(2017,6,14;インタビュー)

しかし、担当の生活保護ケースワーカーからは、A氏が考えてもみなかった更生施設への入所を勧められた。A氏は、ケースワーカーとの面談の中で、疲弊して退職したことからうつ状

態であると言われ、病院はこちらで探すから生活保護が開始になったら受診したらどうかと提案された。A氏は、このころには睡眠がとれていたため自分としてはうつ状態とは思っていなかったが、相手の提案にのった方がスムーズにことが進むと考え、その提案を受け入れた。しかしこのことは、結果として、状況が暗転していくことにつながった。

自分は、寝れてたし、極端に体がうつだって感じはなかったんだけど、向こうが「行ってみたら」って言うんで、これにのっかっちゃったほうが保護がスムーズに行くのかなっていう考えでおったもんで、「ああ、いいですよ」って、最初それにのったんですよ。最終的に、そこがネックになったんですよ。「あなた病気になるから、X寮（更生施設）にとりあえず行って、ちょっと様子見てから、そのあとに部屋を探したら？」って言われたんですよ。（中略）それって、違うじゃないですか。自分から行きたいって言うていけば、その人のそれに当てはまるんですけど、（中略）その人の提案だから、そこで切るより、「ああ、いいですね」ってその人の提案に同調しておいた方がその先、スムーズに行くかなと思ったんですよ。人間って、やっぱり「嫌」っていう人より同調した人の方に気持ちって行くじゃないですか。（2017, 6, 14；インタビュー）

A氏は、生活保護を活用して、失った住居や仕事を取り戻そうとした。ケースワーカーの「提案に同調して」相手の提案を受け入れ、また生活保護受給が円滑に進むよう気遣ったにもかかわらず、アパート生活を望んでいたA氏にとっては自分の意図しない方向にことがすすんでいった。A氏は、ケースワーカーに勧められた更生施設は「最後の墓場みたいな感じ」であり、「そこに行ったらダメだ」と思っていた。

役所の人、半年間そこで我慢したら、スムーズに部屋を見つけて資金も全部出して（アパートに）入れるよーみたいな感じ。でも、いざ入った人とか、知ってる人に聞くと1年とか下手したら2年とかそこにズーっと、ようは（更生施設の）職員が「こいつダメ」「こいつダメ」といって、ずっとそこに居させるって。そこに居る人が嫌になって、逃げちゃうって話を聞いてたもんで、もう（更生施設に入所するのは）嫌になって。

A氏は、更生施設には入所したくないと担当ケースワーカーに伝えたが、ワーカーは「頑な」態度であり、「嫌」になった。またA氏は、このケースワーカーは「人間的に欠損している」と感じていた。

自分が細かいのかもしれないけど、普通だったら（面談が）「終わります」ってなったとき、相談にきた自分が先に出るといふか。その人、忙しいのかなんなのか知らないけど、「終わりました」ってぱっと閉けてすっと閉めるんですよ。自分、個室に取り残された感じみたいになって。あいさつもなくて、「終わりました」って言って、ぱって出て行く人なんです。それって、ちょっとしたことなんですけど。だから、もしかしてこの人、俺のことなんとも思っていないんだなって。で、それで嫌になっちゃって、違う人に替えてくれ替えてくれっていても、もうこの人だからだめって。（2017, 6, 14；インタビュー）

A氏は、生活保護行政に対する期待とケースワーカーに対する信頼を失った。またA氏は、住居を失ってすぐに緊急宿泊施設に入所し、その後宿所提供施設に入所する。宿所提供施設ではアパートに入れると思っていたにもかかわらず更生施設を勧められ、処遇が決まらなかった。そのため、『『緊急泊について』くれと言われ』、再び緊急宿泊施設に入所することになった。更には、また宿所提供施設に行くように指示された。「たらいまわし」と感じ、2回目に宿所提供施設に変わるように指示された時点で、自主的に施設を出ていくことを決断した。

3) 緊急宿泊施設からの退所

<生活保護行政への期待と信頼>を失ったA氏は、「いよいよこれは外だ…。外だなと覚悟」して、野宿をするしかないと決断した。その覚悟を決めて外にでた日、A氏は寝場所を探した。ちょうど高架下の数人の野宿者が寝ていたところに、少し開いているスペースがあった。A氏は、勇気を出してそこに居る人に声をかけるという行動をおこした。

で、こういう世界ってわからないけど、ここに先にいる人にここいいですかって、聞いた方がいかなって思って、いるかどうかもかわからないんですよ、でも「すみません」って、声かけてみたんですよ。ったら、普通にひょっこって出てきて、「わ、大丈夫かな」って思ったけど、「なんだ？」って言われたから、「ここ空いてますか？」って言ったら、「今、土木(事務所)が厳しいから勝手に(小屋は)つくれないよ」って教えてくれた。(2017,6,14;インタビュー)

<将来への展望><希望>を見失っていたA氏は、この男性野宿者はかろうじていい人ではなかったと信頼し、自分が緊急宿泊施設や宿所提供施設に入所していた事の次第や身の上話などを話した。するとその男性の仲間の一人に生活保護を受けてアパートで生活している人がおり、「よかったら俺のどこ来い」と誘われた。A氏は、いい人だなと思って彼についていき、2、3ヶ月、彼のアパートで居候生活することになった。時には、その生活保護受給者と野宿生活者、そしてA氏の3人で喫茶店に行ったりしながら、それなりの生活を送った。

A氏は、このことを「たまたまの境遇」だったと振り返っていた。

4) 生活保護受給者のアパートから退室

生活保護受給者のアパートに居候して2~3ヶ月経ったところで、その生活保護受給者が救急車で運ばれて入院した。その間も住んでいいと言われたが、居続けることもできずそのアパートを退室した。

居候生活は、困ることもなくそれなりの生活であったため、そこを離れることはA氏にとって<安心できる空間>の喪失体験となった。A氏は自分でめぼしいところを探そうと思い立ち、その周囲をぶらぶらと歩きはじめた。ちょうどその時に、この地域は空き家が多く新しい対策をすることが必要だというテレビ番組を思い出し、雨露をしのげる場所として「どうにかこうにか見つけた」のが、5~6年は使っていないさそうな空き家の車庫であった。「すみません。ちょっとご厄介になります」って感じで、母屋と車庫がある中で「車庫の方を借り」、当面の「仮

住まい」として使用することにした。

A氏が見つけた車庫は「自分で言うのもなんだけど、けっこういいところ」で、道路に面したところはシャッターになっていて、横はトタン、家屋と隣り合わせのところは一部ネットになっているが、雪が積もっても動じないほどのつくりになっていた。

ここから、本格的な外の生活が始まったんです。その生活は、そこまで苦ではなかったんです。炊き出しも行ってるし、テレビはもちろんないけど、保護の人の所にいたときとあまり変わらない生活ができたから。(2017, 6, 14; インタビュー)

そこにふとんを運び、台を使ってベッドに仕立て、衣類もそろえた。好きな漫画本などを置いたりもしていた。A氏にとって、この場所は自分の身を守る安全な空間であり、この空間はいつかなくなるものであると感じながらも、一年くらいはここに居てその間になんとか生活を立て直そうと考えていた。この生活は初秋から初春まで続き、寒い冬を優に超すことができた。

5) 「仮すまい」の解体

ところが一転、何の前触れもなく車庫が解体されるという、A氏にとって「まさかのショック」な出来事が起こった。A氏は、その車庫の中にあつた大きなポリバケツの中に、<現金 13 万円>と<運転免許証>、<印鑑><電源が切れた携帯電話>を入れた<リュックタイプの鞆>を隠し入れていたが、すべてなくなっていた。この時一番の危機感を覚えた。

だから、ほんとに一番危機を覚えたのはその時ですよ。青ざめたもん。見に行ったら、なんもないですもん、自分の持ってたものがすべて。その時が一番「あー」と思いましたよ、もう俺、ダメかなって。(2017, 6, 14; インタビュー)

しかしA氏は、直ちに警察を訪れ、拾得物として取り扱いがなかったかどうか尋ね、遺失物の届け出をするという行動をしている。この行動をとった理由について、筆者が行っている健康相談活動の場所で次のように話していた。

そこらへんに放置してあつたり、外だつたりしたらゴミとして扱われるかもしれないけど、土地の中だもんで、解体するとき一回見ると思うんですよ。洗濯物が干してあつたから、とりあえず生活感があるってわかるじゃないですか、で、パッとポリバケツの中見たら、免許証ってわかるじゃないですか。で、連絡はとれないにしても、拾得物でもなんでも、今ここにありますよって感じになると思うけど、それもないもん。だから、明日業者に直接言うしかない。(2017, 4, 13; 参加観察記録)

さらに翌日には再びその場を訪れ、解体業者に直接その行方について尋ねるという行動をとった。その時の様子について、次のように語った。

そこに行って、ありませんでしたかって聞いたんです。もしあつて、どこか持って行ったんなら、持って行ったとこだけ教えてくださって。そしたら最初から「なんでお前に教えるんだー」「なんだバカヤロー」って言われましたよ。最初からですよ。こっちは普通に丁寧な感じで言ってるんですよ。けど、あつちは「てめーバカヤロー」みたいな感じで、あー、

もうこりゃだめだ、あー、もう仕方ないなと思って。(2017, 4, 27; 参加観察記録)

実はA氏は、最初に賃貸契約を結んでいたアパートから出た時も、緊急宿泊施設や生活保護受給者宅をでて「外」と覚悟した時も、「そこまで深刻ではなかった」という。車庫で生活していた時も、「余裕」であった。それは、雨露をしのげる場所があるということだけではなく、お金をもっていたことが大きかったのではないかと振り返る。

自分も変わってるのかなと思うけど。ちょっとお金を持ってたんですよ、まったく持っていないじゃなくて、結局なくなるんだけど。それがあったから、あんまり深刻に考えてはなかったと思って。まだ、こっちに少しあるぞって。なんかそれが、鬼に金棒じゃないけど、あったんでしょね。(2017, 6, 14; インタビュー)

A氏にとって一番安心をもたらしたものは、お金であった。今日の食糧を確保するために、毎日、遠くまで出かけていってアルミ缶回収をして稼ぐ人々をみて、自分は「他とは違うぞ的などもあった」のだという。自分と同じホームレス状態である人であっても、自分は第三者的な見方、ボランティアの支援者たちと同じ目線でホームレス状態にある人を見ていたのではないかという。

やっぱり自分はゼロじゃないしってのがあって、(お金)もってるしみたいな、余裕があるぞっていう感覚があったんですかね。(2017, 6, 14; インタビュー)

しかしA氏は、そのお金をなくしたことによって、最後の砦であった<安心>と<心の余裕>を失った。お金を持っていることで自分とアルミ缶回収をする人との間に線を引き、ある意味プライドをもって生きていた。その<プライド>をも喪失し、「ゼロ」になった。

6) 路上で寝泊まりする生活

A氏は、<すべて>を失って、路上で寝泊まりすることを余儀なくされた。

A氏は、何もかも失くし「ゼロ」になってみると、住居やお金も大事だが、最終的には「伝手」が大事であると思うように変わり、伝手は自分が裏切らない限り残り続けると考えるようになった。人と顔を繋いでおくことが重要だと考えて、当事者やボランティアの支援者に自分から声をかけて仲良くなることを意識して行動している。

A氏にとって、路上で生きることは「墮ちた」という感覚がある。これまで「ランク的にはいいランクではない」が、働いてどうにか生活を維持してきた。決して余裕がある生活ではないが、自分は“そこ”まで行っていないと思いながら、その境をどうにか生きてきた。だからこそ、その線の向こう側で生活している人々を見下げて見ていた。今まで見下げていた生活だけに決していいとは思えずに、マイナスに思う。しかし反対に、“そこ”に墮ちてみて、はじめてわかる心境もあった。

極論で、すごくポジティブな考え方で言うと、まあある意味いいのかなって、人間的な意味で、深みというか、ちょっと違うのかなって。ほんとはいいことじゃないけど、こっちの立場もわかるみたいな。(2017, 6, 14; インタビュー)

A氏は、今のように人とつながりあって、考えを伝えあったり人生経験を聞いたりといった体験はこれまで多くはなかった。サービス業を主にしてきたA氏は仕事の毎日で、人と外食に行ったり遊びに行ったりすることもほとんどなかった。また常連さんと少し会話することはあっても、その他で話すこともほとんどなかった。夜間一人で働いて自宅に帰ってまた出勤するという生活の繰り返しで、「閉鎖的」な生活であった。しかし今の生活は、人間の内面に通じることがある。

いろいろなことがあるんです。物ってわけじゃなくて、人それぞれの考え方ってのも入ってくるわけじゃないですか。その人の人生経験もあって、病気になるって話も聞くじゃないですか。普通の生活してたら、まずありえなから。こちらの考え方も入ってくる、あちらの考え方もあるみたい。自分的に、そういうのも含めて伝手っていうのかな。ただ単に、つながったからとか、いろいろもらえるからとか、よくなるからっていう物質的なものだけじゃなくて、心理的なものも結構楽しいんですよ。(2017, 6, 14; インタビュー)

また、いいことも悪いこともどちらも経験して、幅も広がった。だから、「仕事、仕事、仕事で疲弊していた」心が豊かになってきたと思うともいう。

(この体験はよかったということですか?)

はい、そう。そういう感じするんです。だから、怪我の功名ってね、怪我の功名に近い感じじゃないですか、なんか。いいことじゃないけど、ただじゃ起きないっていうか。人生って一回限りじゃないですか。こういう経験するのも一回限りじゃないですか。まあいいとはいえんけど、悪くもないのかなあって、なんか思うんですよね。(2017, 6, 14; インタビュー)

A氏はくすべてを喪失したが、それでも人とのつながりや心の豊かさを得ることを通して、人間的な深みのある生活を実感していた。

Ⅲ 考察

1. 喪失体験からの回復過程

職を失くしてから約一年という短い期間の中で、A氏は何度も喪失体験を繰り返していた。A氏が体験したものは、人生の展望を完全に失うことであつたり、生命にも直接影響することであつたりなど、おそらく他の多くの人々が経験することのない危機的な状況であった。しかし、A氏は仕事で疲弊してネガティブな状況に留まらざるを得なかった数日間があつたにせよ、「にわかには危機感を感じ」てからは、度重なる危機的状況にあつても、ネガティブな気持ちを引きずり続けることもなく、その都度、早期にその状況に適応し回復の過程をたどっていた。その回復過程では、小塩・中谷・金子・長峰(2002)や平野(2010)が明らかにしたレジリエンスを促進する心理的特性の因子のすべてが備わっていたと考えられる。

A氏は、強い「行動力」をもっていた。携帯電話で炊き出しの情報を知り、未知の世界に飛び込む行動力である。また、誰にも相談することもなく自ら生活保護窓口に相談し、賃貸アパ

ートから退去したその足で生活保護を活用しようと行動した。生活保護行政の処遇はA氏の意図するものではなく、また担当のケースワーカーも信頼できる相手ではなく失望したが、思うようにいかない気持ちをうまく「感情調整」して、新たな行動に向かった。路上で寝とまりすることを覚悟した日、偶然にも声をかけた野宿生活者と打ちとけたことから、生活保護受給者のアパートで居候することになる。A氏には、こわごわではあったが見ず知らずの野宿生活者に自ら声をかけ、打ちとけていく「社交性」があった。生活保護受給者が入院したことでそのアパートから退去するが、その後は車庫を“借りる”という独自の発想力と想像力で生活基盤をつくった。新たな挑戦をする「新奇性追求」であるといえる。生活保護受給者のアパートから退去して寝泊まりができる場所を失くした状況の中でも、ふとテレビ番組を思い出す余裕と発想を転換する力もあった。さらにこの一連の過程において、つまり現金 13 万円などがなくなり「ゼロ」になる前までは、それほど深い危機感をもっておらず、状況を受け入れ常に肯定的で他方では「楽観性」をもって過ごしていたと考えられる。

最終的に現金 13 万円や運転免許証、印鑑などをすべて失い、一番の危機的状況に直面しても、警察に拾得物がないか尋ねたり、解体業者に直接聞きに行ったり、あきらめずにその行方を追おうとする不屈の精神もあった。反面、解体業者に一蹴されると、すぐにあきらめた。あきらめてすぐに気持ちを切り替えるという、A氏の潔さがあった。不屈の精神は「肯定的な未来志向」であり、潔さは「統御性」でもあるといえる。この結果、A氏は路上で寝とまりすることを余儀なくされたが、住居もお金も、人生において形づくってきたすべてのものを失った中であっても、目の前にいる当事者やボランティアの支援者とのかかわりに価値を見出していた。A氏は物質的なものではない、目に見えない人と人との関係が大事であると思える価値変容をしていった。

A氏は、今の状況を「いいことも悪いこともどちらも経験して、幅も広がった。だから、仕事、仕事、仕事で疲弊していた心が豊かになってきたと思う」といい、人生は一回限りであるため「まあいいとはいえんけど、悪くもないのかなあって、なんか思うんですよね。」とも語っていた。A氏は、路上で寝泊まりする以前には、なんとか生活を立て直そうと将来だけをみて生活していた。しかしすべてを失ったとき、これまでの人生を振り返ることで今の自分を肯定し、またこれからの人生においても有意義な時間になるはずであると、今、ここで、こうして生きている意味を見出していた。それには、「仕事、仕事、仕事で疲弊していた」コンビニエンスストアでの勤務経験が影響しており、他者との会話もほとんどなく仕事ばかりしていた頃があったからこそ、今を肯定できるのであると考える。つまりA氏にとっては、家があっても疲弊する毎日よりも、家を失っても心が豊かになった今の方がよい状態であり、回復の過程であるといえる。

2. 回復する過程と野宿生活への適応

A氏は、さまざまな喪失体験を繰り返す中でも、その状況にうまく適応しながら生きてきた。路上で寝泊まりすることを余儀なくされても、心が豊かになったと言っていることから、A氏は傷ついた後の回復の過程をたどったといえる。しかし、この「回復」の過程は、同時に野宿生活への「適応」の過程でもある。

後藤は、将来の展望を失った人は、先の見えない状況をなんとか生き抜くために、あえて先を見ないことでその生活に適応しようとしているのではないかという。野宿生活という厳しい生活が続くとすれば、生き抜くためにつらさや不安を自ら押し殺さなくてはならず、だんだんつらさや不安は遞減していき、ついには野宿生活を肯定的にとらえようとしていくと説明する(後藤、2007)。今回のA氏の場合でも、自らを肯定し生きる意味を見出していた。もちろん、生きる意味を肯定することは逆境の中での生きる力になるのではあるが、それと同時に、そうしなければ野宿生活を生きられないという野宿生活に適応する過程でもあり得ると考えられる。

野上は、「野宿生活の最初のころは、生きる希望がないので自殺を思った」ができなかったという当事者の思いを記述している。一年ほど過ぎると環境に慣れたが、この生活から「早く抜け出したい」と思っているという(野上、2002)。野宿生活は、自身のプライドも喪失するほど、また生きる希望を失うほど過酷である。そのつらい感情を回復しようと、人はその状況に適応して生きる。しかしその回復し適応する過程は、逆に野宿生活を長期化させ、さらに状況を悪化させる可能性がある。

A氏は、野宿生活で「心が豊かになった」というが、同時に「冬までにはなんとか(野宿生活から脱出)したい」とも語っていた。つまり、A氏のレジリエンスには、よい方向に向かう「回復」とよくない方向に向かう「野宿生活への適応」という、相反する2つの現象が含まれていると考えられる。今後も野宿生活が続いていく中で、A氏がよりいっそう今の状況を肯定していけば、A氏が目標とする「冬までにはなんとか」することを難しくさせる。野宿生活から抜け出すためには社会サポートが必須であるものの、A氏の場合では特に生活保護行政のあり方が問われる。

IV 結論

A氏へのインタビューと参加観察記録から、喪失体験の中でA氏が回復の過程に向かった理由や因子を分析した。A氏のレジリエンスについて以下、1) 2) の結果が得られた。さらに、3) には今後の課題を示す。

1) A氏は、約一年という短い期間の中で何度も喪失体験を繰り返していたが、ネガティブな気持ちを引きずり続けることもなく、その都度、早期にその状況に適応し回復の過程をたどっていた。その回復の過程では、これまでの明らかにされているレジリエンスを促進する心理特性因子である「新奇性追求」「感情調整」「肯定的な未来志向」「楽観性」「行動力」「社交性」のすべてが見られた。

2) A氏のたどった過程は、「回復」の過程でもあり同時に野宿生活への「適応」の過程でもあると考えられた。A氏のレジリエンスには、よい方向に向かう「回復」とよくない方向に向かう「野宿生活への適応」という、相反する2つの現象が含まれていたことがわかった。

3) A氏の事例研究によって、様々な喪失体験をした中であっても能動的で前向きに生きている野宿生活者がいることが明らかになった。しかし、本論では一例のみをとりあげたため、すべての野宿生活者に同様のことが言えるとは限らない。また今回データとしたA氏の語りは、あくまでも「インタビューをしたその時点」におけるA氏の体験であり、A氏のある時期の生活の中で発揮されたレジリエンスを考察したものである。つまり、それ以降においても「家を失っても心が豊かになった今の方がよい状態である」という気持ちが変わらずにあるとも限らない。従って、今後は他の野宿生活者のレジリエンスや、A氏のようにある時点では野宿生活を肯定している人々のレジリエンスがその後どのように変化していくのかについても情報の蓄積と比較分析を重ねていくことが必要である。また、レジリエンスが発揮されることが野宿生活の長期化の要因になり得るかという点についても、今後、研究を進めていきたい。

謝辞

今回のインタビューに快くご協力くださったAさんに心から感謝をしたい。Aさんの望む生活を、一日でも早く取り戻せることを願う。

註

1) 佐藤・金井(2017)のレジリエンス研究の動向に関する研究において、レジリエンスの定義は1970年代の創成期から議論されてきており、2017年時点ではMastental.(1990)が示したこの定義が最も多く引用されているとしている。

2) ある男性(40)の場合では、会社の倒産とアパートの取り壊しのために住居を失った。家財道具をすべて友人に譲り、自分は8,000円と携帯電話だけで路上にでた。アパートを出た当日はパニックで記憶がなく、すべてから逃げ出したいという一心だった。行くあてもない。情けないと思って歩きながら涙がこぼれてきた、という体験を語っている(神戸・大畑、2002、136-148頁)

3) 2007年から炊き出しの場で月2回開催しているものである。血圧測定をきっかけとして関係をつくり、健康に関する相談にのったり健康を維持できる方法をともに考えたりしている。

4) 緊急宿泊施設は、市が独自に行っている生活保護以外の援護施設である。住居がない生活困窮者に対して、市が指定した民間宿泊施設で宿泊援護を行うものである。

5) 名古屋市内を中心として行われている炊き出しの週間スケジュールが書かれている一覧表のことである。やむなく路上に出て日が浅い人など、炊き出しスケジュールを知らない人々に渡すことが多い。

6) 生活保護法第 38 条に規定されている保護施設の一つである。宿所提供施設は、住居のない要保護者に対して、住宅扶助を目的とする施設である。

引用文献

- 太田美里・岡本祐子「レジリエンスに関する研究の動向と展望—環境要因と意味づけの着目—」『広島大学心理学研究』17、15-24 頁、2017 年。
- 長内綾・古川真人「レジリエンスと日常的ネガティブライフイベントとの関係」『昭和女子大学生活心理研究所紀要』1(7)、28-38 頁、2004 年。
- 小塩真司・中谷素之、金子一史、長峰伸治「ネガティブな出来事からの立ち直りを導く心理的特性—精神的回復力尺度の作成—」『カウンセリング研究』35(1)、57-65 頁、2002 年。
- 厚生労働省『ホームレスの実態に関する全国調査報告書』2003 年。
- 厚生労働省『ホームレスの実態に関する全国調査（生活実態調査）の結果（詳細版）』
https://www.mhlw.go.jp/file/04-Houdouhappyou-12003000-Shakaiengokyoku-Shakai-Chiikifukushika/02_homeless28_kekkasyousai.pdf (2019,7,22 検索)。
- 神戸幸夫、大畑太郎『新・ホームレス自らを語る』アストラ、2002 年。
- 小林孝子・松田能宣・所昭宏「レジリエンスの関与が考えられたがん患者の 2 事例」『心身医学』58(3)、274-281 頁、2018 年。
- 後藤広史「前路上生活者が施設から『自己退所』する要因」『社会福祉学』47(4)、31-42 頁、2007 年。
- 桜井厚・小林多寿子『ライフストーリー・インタビュー 質的研究入門』第 4 刷、せりか書房、2013 年。
- 佐藤暁子・金井篤子「レジリエンス研究の動向・課題・展望—変化するレジリエンス概念の活用に向けて」『名古屋大学大学院教育発達科学研究科紀要』64、111-117 頁、2017 年。
- 白井裕子「野宿生活者の看護支援のあり方に関する研究」『聖隷クリストファー大学看護研究科修士論文』2006 年。
- 高橋征二・神林博・グッドウィン・ロビン・孫少晶・ベン・エズラ メナケム「東日本大震災における喪失体験とレジリエンス—平成 23 年度宮城県民間賃借借上住宅入居者健康調査に基づく 2 次分析—」『東アジア研究』15、201-211 頁、2017 年。
- 野上亜希子「路上生活者における喪失体験と悲哀の心理」『心理臨床学研究』20(2)、133-144 頁、2002 年。
- 平野真理「レジリエンスの資質的要因・獲得的要因の分類の試み—二次元レジリエンス要因尺度(BRS)の作成」『日本パーソナリティ心理学会』19(2)、94-106 頁、2010 年。
- 平野真理「心のレジリエンス」『レジリエンスの諸相—人類史的支援からの挑戦—』一般財団法人放送大学教育振興会、230-245 頁、2018 年。

ボナーノ、ジョージ・A・(監訳：高橋祥友)『レジリエンスー喪失と悲嘆についての新たな視点』金剛出版、2014年。

村木良孝「レジリエンスの統合的理解に向けてー概念的定義と保護因子に着目してー」『東京大学大学院学研究科紀要』55、281-289頁、2015年。

山際志穂・辻河昌登「路上生活経験者の内的世界に関する心理臨床学的研究」『発達心理臨床研究』15、133-143頁、2009年。